

文字言語の創造性に関する認知言語学的研究 —認知文字論の構築にむけて—

黒田一平

要約

本論文は、認知言語学の理論的枠組みを用いて文字に関する諸現象を記述・分析することにより、音声言語だけでなく文字言語の創造性にも認知的動機付けが関わっていることを示すことを目的とした、理論的・実証的研究である。本論文は全7章構成であり、各章の内容は以下のとおりである。

第1章では、従来の文字研究と言語研究を批判的に検証し、理論言語学の観点から文字言語を研究する意義について論じている。西洋を中心とする伝統的な言語科学では文字が関わる多様な言語現象を包括的に取り扱うことができないという点や、伝統的な文字研究においては創造的な文字使用について等閑視されているという点などを述べている。また、論文全体として、理論的側面から始まり、文字論の伝統的なトピックから、より新規で創造的なトピックに向かって論じていくことを述べている。

第2章では、はじめに文字の研究には、個別の文字体系を扱う伝統的な文字研究である文字学と、文字体系一般に関する言語学的研究である文字論があることを述べている。そして、近代以降の理論言語学は文字論を軽視しているという点を指摘し、音声言語を重視しつつ文字言語を前提とする分析概念を用いている近代以降の言語学の歪みを是正する試みとして、本論文を位置付けている。さらに、文字論で用いられている概念や用語が統一されていない点を指摘し、以降の議論の為に用語の整理を行っている。

第3章では、文字論で従来論じられてきた類型的な分類や歴史的な変化だけでなく、コミュニケーション上での実際の文字の運用についても取り扱うために、認知言語学の言語観（記号観）や諸理論・諸概念について概観している。そして、認知言語学においては、言語は音韻極と意味極の対として記述されるため、文字が関わる現象に関して適切な記述・説明を行うことができないことを確認し、音韻極と意味極に加えて、書記極（文字・表記）を明示した複合ネットワーク・モデルである「拡張記号モデル」を提示している。このモデルは、言語の意味、音韻、書記のそれぞれにおいて、ゲシュタルトとして知覚される単位（ユニット）が、類似性と近接性（部分-全体関係）および包摂関係（類-種関係）という3種類のリンク（概念連合の基盤）によって結び付けられることで、言語主体の知識が動的に変化・拡張してい

く過程を記述するモデルである。以下、第4章から第6章では、このモデルを用いて、文字や表記が関わる具体的な現象・事例に関する記述・分析を行っている。

第4章では、漢字の六書の分類が他の文字体系の成立や発展についても当てはまるという先行研究の主張について、理論的考察を行っている。はじめに文字の成立と発展について概観し、現存する文字体系の多くが表語文字として成立し、そこから表音文字（表音要素）を発展させていったことを確認する。続いて、六書の各分類について考察していく。象形と指事に関しては、先行研究では指示対象の視覚的イメージが何らかの形で字形に反映されているとされている。本論文においては、象形の場合、その動機付けは主に「対象レベルの類似性」であり、指事の場合はより抽象的な「関係レベルの類似性」である点を指摘した。会意文字については、同一の構成要素からなる「重複型会意」と、それ以外の「非重複型会意」に大別し、構成要素の意味極が、部分-全体関係をもとにメトニミー的推論を経て、合成構造全体の意味極を構成している点を確認した。形声文字については、声符が合成構造の読みしか表さないとされる「純粹な形声」と、読みだけでなく意味も表す「会意兼形声」に分け、声符や義符が表す読みや意味が、合成構造全体の意味への参照点となっていることを示した。仮借と転注については、意味極や音韻極におけるスキーマ性の増加や、記号としての複雑性や自立性の低下という方向性が、音韻言語における文法化にもみられる変化の方向性である点を指摘した。以上の議論を通して、文字の変化に対する言語学的分析が、文字研究に言語学的妥当性を与え、また逆に理論言語研究における理論の検証の範囲を広げることが示された。

第5章では、仮借や転注による表語文字の表音・表意要素化や、それを組み合わせる会意や形声などの原理が、文字の成立・発展期のみでなく、文字の使用（表記・書記法）においてもみられるという点を、具体例をもとに論証している。はじめに、英語の正書法における綴りの表音性と表語性を確認し、黙字や所謂 magic e 等が、拡張記号モデルによって適切に記述可能であることを示している。次に日本語の当て字とルビについて分析を行った。当て字の一種である借字では、意味とは無関係に漢字が用いられるとされているが、本論文では、当て字全体の意味に対する構成要素の漢字の意味の寄与の程度が様々に異なることを示している。また、漢字の意味にもとづく当て字である義訓においては、ルビ部分が表音要素、漢字部分が表意要素となり、声符と義符から文字全体が表す語を特定する形声文字と同様の構造となっていることを示している。続いて、ルビの用法についてさらに詳細に検討し、振り仮名としてのルビの典型的用法だけでなく、近年の小説などにみられる拡張的な用法をも含めて、拡張記号モデルの観点から、その解釈過程を論じた。これにより、ルビの各用法を、「漢字部分X+小さい振り仮名Y」という形式と、「XとYが同語（同音同義）関係である」という構文的意味を典型とする「ルビ構文」と、そこからの拡張としてまとめている。さらに、ルビと関連の深い丸括弧の分析を行い、

主に自然言語処理の分野で研究されてきた丸括弧の多様な用法を、「X (Y)」という形式と、「Xを解釈するためのベースにYを位置付ける」という意味（機能）をもつ「括弧構文」の下位構文としてまとめている。最後に、丸括弧以外の約物についても同様の分析を行っている。

第6章では、では、文字の表音性・表意性を利用した創造的な文字使用のうち、現代日本語の事例を中心に分析している。具体的には、はじめに創作漢字については、漢字の字形の構成や偏・旁などの構成要素の表意性・表音性をもとに、言葉あそびや宣伝・広告を目的として、既存の文字だけでなく絵まで用いている例を見ている。これらの例は、漢字に関する構文的知識の拡張的な利用としてまとめられる。続いて、近年問題となっている難読名であるキラキラネームを分析している。キラキラネームは、人名に対する一般的でない当て字として問題視されることが多いが、本論文では、先行研究で等閑視されている「人名としての典型（逸脱）性」と「表記としての典型（逸脱）性」の区別を行う必要性を指摘した。このうち、表記としての典型（逸脱）性には、当て字一般にみられる漢字の表意性・表音性を利用していることを示している。最後に、ネット上の一部で用いられている新規表現であるネットスラングを取り上げている。拡張記号モデルによる記述によって、ネットスラングが意味極における比喩的な拡張関係だけでなく、形式極（音韻極や書記極）における類似性や近接性を基盤とする拡張関係にもとづいている点や、文法化との共通点を指摘している。さらに、オンライン上の談話の進展にともなう動的な変化についても記述・分析している。以上の議論によって、本論文の拡張記号モデルによる記述・分析が、伝統的な文字・表記に対してだけではなく、これまであまり扱われてこなかった非慣習的・創造的な文字使用にも有効であることを示している。

第7章では、全体のまとめを行うとともに、今後の展望を述べている。各章の議論を通じて、文字言語の創造性の要因として、比喩を動機づけている類似性や近接性（部分-全体関係）、類-種関係が文字や表記にも関わっているだけでなく、文字言語特有の「非線状性」や「逆行性」の影響も明らかにした。また、創造性に関する制約としては、拡張の程度が高すぎることによる逸脱や、読み手の知識不足などが挙げられる。本論文では、拡張記号モデルという認知図式を用いることで簡略かつ統一的な記述を行っているが、このことは、認知言語学的枠組みで文字や表記についても扱うことを可能にしたという理論的な貢献をも果たしている。本論のもう一つの貢献として、従来研究されてきた言語の意味面の創造性だけでなく、形式面の多様性についても示した点が挙げられる本論で提唱した「認知文字論」の枠組みと「拡張記号モデル」は、伝統的な文字学および最新のCMC（電子メディア）における言語的研究、自然言語処理、情報科学、教育学や言語教育、言語政策、広告・デザイン業界のような分野・領域においても、今後の展望が期待される。最後に、本論文が提示している「認知文字論」は、従来の言語研究よりも言語の伝達媒体を重

視している点や、広告・看板や電子掲示板などのような環境に埋め込まれた言語表現にも着目したという点で、まさに環境と人間についての総合的な学問としての人間・環境学であるといえる。